

主 題：誘惑の極み

聖書箇所：マタイの福音書 4章1－11節

先週、多くのいのちを奪った一人の宗教家に死刑判決が下りました。その翌日の新聞のコラムにドイツの劇作家クライストの戯曲「壊れがめ」の中のこのようなセリフが紹介されていました。「神の存在を認めない不逞の文章は多数ございますが、悪魔の存在を的確に否定し去った者は、いまだ無神論者の中にもございません。」と。そして、別のコラムに「神より悪魔にリアリティがあるのは自分の心の中の悪を誰しもが感じるからであろう」とも記されていました。空想の存在ではなくて実在の存在、それがこの悪魔です。人々を惑わし誘惑し、真理に至らないように、罪の赦しを間違っても受けることがないようにとだまし続ける偽りの父、また、キリスト者を日夜主なる神の前で訴えている告発者、その力と知恵は私たちのそれよりはるかに優れているゆえに、私たちがどうすることもできないこの力と知恵にあふれた墮落した天使、これが主なる神の、また、私たちクリスチャンの敵であるサタン、悪魔です。

イエスが死海のほとりから西に広がるユダの荒野に出て行かれたのは、私たちの力ではどうにもできないこの敵である「悪魔の誘惑を受けるため」であったことが、マタイの福音書4：1で教えています。「さて、イエスは、悪魔の試みを受けるため、御霊に導かれて荒野に上って行かれた。」と、偶然イエスは荒野へ行かれたわけではなく、神ご自身がそのように導かれたことであったと教えるのです。2節「そして、四十日四十夜断食したあとで、空腹を覚えられた。」と、そのときにイエスのもとに悪魔が誘惑のためにやって来るのです。

3節から、イエスが受けられた**三つの誘惑**を見て行きますが、それによって悪魔がどのように誘惑するのか、悪魔の誘惑の手口というものを知ることができます。また同時に、イエスがその悪魔に対してどのように立ち向かわれたのかを見ることによって、私たちが悪魔の誘惑にどのように勝利できるのかを知ることができるのです。そして、このテキストは再びイエスがだれなのかを私たちに明らかに示すのです。

★ 悪魔の誘惑の方法とそれから自分自身の身を守るための秘訣

I. 神の真実さへの不信を与える 3－4節

1) 「試みる者」による誘惑 3節

3節「すると、試みる者が近づいて来て言った。「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」。

(1) イエスの心に慢心を抱かせようとする

ユダヤ人は「神の子」ということばを聞くとき、それが「神」を意味することを知っていました。ヨハネの福音書の中にユダヤ人たちがイエスを殺そうとしたその理由が記されています。ヨハネ5：18「このためユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとするようになった。イエスが安息日を破っておられただけでなく、ご自身を神と等しくして、神を自分の父と呼んでおられたからである。」、イエスのご自分がだれであるかを彼らに語ったのです。ご自分が神であることを明らかにされました。唯一まことの神がわたしの父であり、わたしは父の子であると言ったとき、ユダヤ人たちは神を冒瀆する、彼は人間であるのに自分を神としていると言ってイエスを殺そうとしたのです。ですから、彼らは「神の子」と聞いたときそれは「神」を指しているとすぐに悟ったのです。

さて、サタンが言った「あなたが神の子なら」ということばには、原文ではここに「もし」という条件を表わす接続詞が付いています。「もし、あなたが神の子なら」「もし、あなたが神ならば」、そして、「もし、あなたが救世主なら」と言うのです。サタンはイエスがだれであるかを知っています。父なる神がイエスのことをそのように宣言されました。マタイ3：17「また、天からこう告げる声が聞こえた。「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。」。イエスは悪魔からこの誘惑を受ける前バプテスマを受けられました。そのとき、父ご自身がイエスは約束の救世主であることを証言されたのです。父なる神はイエスを愛し、喜ばれました。それは、イエスが罪のない完全な人であったからです。サタンはイエスが神であること、神の子であり、救い主であることを知った上で「あなたが神の子なら」と言ったのです。なぜでしょう？この最初のサタンの誘惑を通して、私たちはサタンの誘惑の手段、方法を知のです。「もし、あなたが神の子なら、このようにして見なさい」と働きかけるのです。

(2) イエスの心に父なる神への不信を抱かせようとする

イエスの心に、なぜ？ どうして？ という思いを抱かせようとするのです。サタンの誘惑はこうです。「もし、あなたが神なら、救世主なら、どうしてあなたはそのような空腹を経験しなければならないのです

か？あなたは偉大な神のはずなのにそんなみじめな状況に置かれるなんて可笑しくありませんか？あなたにふさわしい扱いを受けるはずではありませんか？父なる神はどうしてしまわれたのでしょうか？あなたのことを忘れてしまわれるなんて酷いお方ではありませんか？あなたは神の子なのですから、父なる神がしてくださらないことをあなた自身の力でやって見たらいいですよ。この石にパンになるように命じたら必ずそうなるから、あなたの必要を満たしたら良いでしょう。だってあなたは神なのだから。」と。それによって、悪魔はイエスの心に父なる神への不信感を抱かせようとし、自分の力で自分の欲しいものを得るように努力しなさいと言うのです。

慢心というのは神への謙虚さを私たちから奪ってゆきます。自分の思う通りにならないとそれに苛立ちを覚え、神のみこころよりも自分の考えを優先し始めます。慢心を許してしまうとこのような罪へと発展して行くのです。私たちはペテロの証言を先週見ました。イエスに対して「あなたは、生ける神の御子キリストです」と。そのすぐ後でペテロは大きな罪を犯しました。成功の後が実は一番危険なのです。バークレーという神学者は言います。「感激の後には必ず反動が来る。これは人生の厳粛な事実である。そして、この反動のときが危険なときである。エリヤはこれを経験した。彼は超人的な勇気をもって、単身、カルメル山上でバアルの預言者たちと対決し勝利を治めた（I列王記18：17-40）。これはエリヤが勇気を鼓舞し神のために尽くした最高のときであった。しかし、バアルの預言者たちが殺されたことを知ったイザベルは激昂しエリヤを殺そうとした。彼はそれを恐れて自分のいのちを救うために立って逃げ、ユダに属するベエルシェバへ行った（I列王記19：3）。衆敵に立ち向かった英雄は、今恐怖に駆られて逃げ回る。反動のときが来たのである。偉大な瞬間、偉大な経験のあとには必ず反動が来る。抵抗する力が最高度に達した後で急に減少して最低になる。これが人生の法則である。」と。私たちが気を付けることが必要です。信仰的に絶好調、すばらしいみわざを見た、すばらしいことを達成できた、その次の瞬間にそこから落ちてしまうというのです。「私はこれだけの人に伝道してきた！」「教会を作ったんだ！」「役員をした、宣教師をした、日曜学校の教師をした、牧師をした！」と過去の栄光、自分の功績（ほんとうはそうではありません）などに心を奪われてしまうなら危険です。しかし、聖書を見るとそのようなことが繰り返し行なわれてきたことが分かります。慢心が生む失敗です。

2) イエスの答え 4節

4節「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。』と書いてある。」、サタンの誘惑に対してイエスが答えて言われたこと、これは申命記8：3のみことばが引用されています。申命記8：2-3「あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならぬ。それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。：3 それで主は、あなたを苦しめ、飢えさせて、あなたも知らず、あなたの先祖たちも知らなかったマナを食べさせられた。それは、人はパンだけで生きるのではない、人は主の口から出るすべてのもので生きる、ということ、あなたにわからせるためであった。」。なぜ、イエスはこのみことばを引用して答えられたのでしょうか？それは、人間にとって何が一番大切であるかを教えようとしたのでした。申命記のみことばはモーセが民に語っていることですが、40年間荒野をさまよって来たイスラエルの民、彼らは神を信頼しなかったその罪によってそのような状況に置かれたのです。ヨシュアとカレブを除いたすべての民は滅んで新しい世代の者たちが起こって来ました。そして、彼らが今まさにヨルダンの地に入ろうとしたとき、モーセは彼らにこのメッセージを与えたのです。40年間の神のイスラエルの民への取り扱いのすべては、人間は神を信頼して生きなければならないこと、それが一番大切だと教えるためであったと言うのです。イスラエルの民がすべきことは神に頼ることでした。神はそのことを教え、私たちがそれを学ぶためにそのような環境に置かれるのです。ときに神は私たちがいろいろなものを奪って行かれます。健康であったり何か大切なものであったり。そのとき、私たちは神に頼り、一時的なものではなく永遠に続くものに目を留めなければならないことを学びます。神はいろいろなことを通して、私たちが何を一番大切にしなければならないかを教えてくださるのです。イスラエルの民はそれを学ぶべきでした。そこでモーセは彼らに「人はパンだけで生きるのではない、人は主の口から出るすべてのもので生きる、」ことを教えたのです。パンよりも水よりも肉よりももっと大切なものがある、ということ、旧約のその時代にも、そして、今イエスがこのサタンの誘惑を通して私たちにも教えようとしているのです。それは「神のみことば、神のみこころに従って生きて行くこと」です。ですから、このあと、イエスは山上の説教の中で、何を食べようとか、何を飲もうとか、何を着ようとか、そのようなことを心配してはならないと話されます。6：25からです。そして、その最後6：33で「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」と言われたのです。私たちにあって最も大切なものは神だということ、この神に従って行くことが私たちにあって一番大切だと教えるのです。

サタンの誘惑はこの神への信頼をぐらつかせようとしたのです。神のみこころに逆らって生きるよう

にと誘惑しようとしたのです。今もこのような働きをサタンはするのです。たとえば、私は神に愛されていることを知っている、けれども、自分の欲しいものが与えられないとき、神のこぼを疑い自分の力で何とかそれを得ようとします。また、私のすべての必要は神が与えてくださるという神の約束を知っている、しかし、自分の考える必要が、自分の考える最善のときに与えられなければ、私たちは神の約束を疑うのです。自分の足りないところ、欠けたところを自分の力で知恵で努力で埋めようとするのです。イエスは決して神のおこぼを疑うことがなかったのです。神のおこぼこそ偽りのない真実だからです。私たちが覚えるべきことは、皆が求める本当の幸せ、満足、喜びは自分の欲しいものを手に入れることによって得ることはないということです。「幸せは自分の手でつかむのだ」はNOです。それは無理なことです。神に忠実に従うことによってのみ得ることができるのだとイエスは教えているのです。それを何よりも優先するようにと教えるのです。

II. 神のみことばへの不信を抱かせる 5-7 節

「すると、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の頂に立たせて、:6 言った。「あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。『神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる。』と書いてありますから。」:7 イエスは言われた。「『あなたの神である主を試みてはならない。』とも書いてある。」

1) 悪魔による誘惑 その2 5-6 節

(1) 再び、イエスの心に慢心を抱かせようと試みる 6 節

6 節を見ると再びサタンはイエスの心に慢心を抱かせようとしていることが分かります。「**あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。…**」と、ここにも「もし」という条件を現わす接続詞が付いています。そして、

(2) イエスの心に神のこぼへの疑いを抱かせようと試みる 6 節

イエスがみことばによってサタンの初めの誘惑を退けられたので、今度は彼もみことばを用いて惑わそうとするのです。6 節は詩篇 91:11, 12 のみことばを引用しています。「**まことに主は、あなたのために、御使いたちに命じて、すべての道で、あなたを守るようにされる。**」:12 **彼らは、その手で、あなたをささえ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにする。**」。ここにサタンの見事な惑わしがあります。

サタンの惑わし

(1) 神のみことばを私的に解釈する：自分勝手な解釈を施そうとするのです。というのは、詩篇のみことばをよく見ると、6 節には抜けていることばがあることに気付きます。「すべての道で、」ということばをサタンは省いています。詩篇 91 で神が教えていることは「神の前に正しく歩む者を神は守られる」ということです。ところがサタンはこのみことばを巧みに使って自分のメッセージを伝えるのです。「神はあなたが何をしてもあなたを守られる」と、彼は「すべての道で」とは言わなかったのです。奇跡を行なってくれるというメッセージです。たとえ 135 メートルの高さの神殿の頂から飛び降りたとしても、天使が守ってくれる！、そのようにみことばが約束している！と言います。自分のメッセージをイエスに語るのです。

(2) みことばを試してみないと信じない：試してみても自分で納得しないと信じない、つまりサタンは「神は守る」と書いてあるのだから本当にその通りか「下に身を投げてみなさい」、そうするならば結果が分かるからと言うのです。サタンは大変なことをイエスに為そうとしました。神のおこぼだけでは不十分、自分で確かめてみなさいと、確かな証拠がなければ信じないようにと、これは不信仰の罪です。

2) イエスの答え 7 節

これも申命記 6:16 の引用です。「**あなたがたがマサで試みたように、あなたがたの神、主を試みてはならない。**」と、マサという所でイスラエルの民は神を試みた、そのようなことをしてはならないというこの申命記のこぼをイエスは引用されたのです。では、「マサ」で何が起こったのか、「マサ」とは「メリバ」とも言われる所ですが、これはイスラエルの民が荒野にいたときに起こった出来事です。出エジプト 17:1-7 を見ましょう。「**イスラエル人の全会衆は、主の命により、シンの荒野から旅立ち、旅を重ねて、レフィディムで宿営した。そこには民の飲む水がなかった。:2 それで、民はモーセと争い、「私たちに飲む水を下さい。」**と言った。モーセは彼らに、「**あなたがたはなぜ私と争うのですか。なぜ主を試みるのですか。**」と言った。:3 **民はその所で水に渴いた。それで民はモーセにつぶやいて言った。「いったい、なぜ私たちがエジプトから連れ上ったのですか。私や、子どもたちや、家畜を、渇きで死なせるためですか。」**:4 **そこでモーセは主に叫んで言った。「私はこの民をどうすればよいのでしょうか。もう少しで私を石で打ち殺そうとしています。」**:5 **主はモーセに仰せられた。「民の前を通り、イスラエルの長老たちを幾人か連れ、あなたがナイルを打ったあの杖を手にとって出て行け。:6 さあ、わたしはあそこのホレブの岩の上で、あなたの前に立とう。あなたがその岩を打つと、岩から水が出る。民はそれを飲もう。」**そこでモーセはイスラエルの長老たちの目の前で、そのとおりにした。:7 **それで、彼はその所をマサ、またはメリバと名づけた。それは、イスラエル人が争ったからであり、また彼らが、「主は私たちの中におられるのか、おられないのか。」**と言って、主を試みたからである。」

★イスラエルの民は神を試みた

2節にモーセが民に「あなたがたはなぜ私と争うのですか。なぜ主を試みるのですか。」とあります。そして、7節「主は私たちの中におられるのか、おられないのか。」と言って、主を試みたからである。」、イスラエルの民は主を試みたのです。彼らは神の言われたことが真実かどうかはその結果を見なければ信じないとする態度でした。神がともにおられるということは彼らが聞いてきたこと、教えられてきたこと、そして、実際に見てきたことなのに、彼らは「今私たちは水がほしい！水をくれたら神がともにいることを信じるけれども、くれないのなら信じない」と言うのです。このような罪を彼らは神の前に犯すのです。私たちが気を付けていないとそのようなことをしてしまいがちです。

たとえば、私たちは祈りを神に捧げます。神がその祈りに答えてくれたら神が私を愛していることを信じる、でも、そうでなければ信じない、神が自分の望んでいることをしてくれれば、神の約束が本当であったことを信じる、とこのような態度…。これは、不信仰以外の何ものでもありません。神がいわれたおことばだけでは不十分、神がわざを為してくださなければ信じない、だから、神を試すのです。私たちが物を買うとき、ほんとうにその通りかどうか試してみるのには信用しないからです。信用していたら試すことはしません。私たちが試すのは100%信用しないからです。確認しなければならぬのです。神に対してもこのような態度、神がいわれたことを試してみなければ私は信じませんと。これは神よりも自分を上に置いてしまっています。自分が神の真実さを審査する者になっているのです。神が証拠を示してくれたから、私が求めた奇跡を行なってくれたから信じます、この態度が問題なのです。だから、イエスは言われるのです。主を試みてはならない、主がいわれたことはその通りなのだからそれをそのまま受け入れるようにと。**神がいわれたのだからそれを信じる**のです。自分の為すべきことをしないで「神さま、神さま！」ということ、それは神を試みることです。

Ⅲ. 神のみこころへの不信を抱かせる 8-10節

「今度は悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて、:9 言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」:10 イエスは言われた。「引き下がれ、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ。』と書いてある。」

1) 悪魔による誘惑、その3：サタンの方法による約束の成就

サタンがしたことは、イエスを高い山に連れて行ってこの世のすべての国々とその栄華を見せて、「これを全部あなたに差し上げましょう。」と言ったのです。この世のすべてのものがイエスの支配下になることは、イエスご自身もご存じのことです。そのことは詩篇2篇で教えられています。ここに救世主にすべてのものが与えられることが約束されています。

「なぜ国々は騒ぎ立ち、国民はむなしくつぶやくのか。:2 地の王たちは立ち構え、治める者たちは相ともに集まり、主と、主に油をそそがれた者にと逆らう。:3 「さあ、彼らのかせを打ち碎き、彼らの綱を、解き捨てよう。」:4 天の御座に着いておられる方は笑う。主はその者どもをあざけられる。:5 ここに主は、怒りをもって彼らに告げ、燃える怒りで彼らを恐れおののかせる。:6 「しかし、わたしは、わたしの王を立てた。わたしの聖なる山、シオンに。」:7 「わたしは主の定めについて語ろう。主はわたしに言われた。『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。:8 わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。:9 あなたは鉄の杖で彼らを打ち碎き、焼き物の器のように粉々にする。』」:10 それゆえ、今、王たちよ、悟れ。地のさばきづかさたちよ、慎め。:11 恐れつつ主に仕えよ。おののきつつ喜べ。:12 御子に口づけせよ。主が怒り、おまえたちが道で滅びないために。怒りは、いまにも燃えようとしている。幸いなことよ。すべて主に身を避ける人は。」

では、サタンは何が言いたかったのでしょうか？

(1) サタンの提案

この神の計画、神のみこころよりももっと良い考えがあります、あなたのものになるこの世のすべてを、私がたった今すぐ差し上げます、そうするなら苦しむこともないし、辱めを受けることもない、十字架に架かることもないと、これがサタンの提案です。ただし、そこには条件が付いていました。

(2) サタンの条件

9節にあります。「私にひれ伏すなら」、「私を崇拝するなら」、これがサタンがすべての者に望んでいることです。サタンは自分が神として君臨したい、すべての者から神としての崇拝を受けたいとします。そして、唯一それをしないイエスに向かって「もしひれ伏して私を拝むなら」、私はあなたが後に与えられると約束されているものをたった今与えますと言うのです。

イエスが十字架にお架かりになって行かれるときのその苦しみは、福音書を見るときに私たちには明確に分かります。死が近づいてきたことをご存じだったイエスは苦しまれた、それは私たちのために身代わりになることを嫌がられたのではなく、父なる神と引き裂かれること、神の前に罪ある者となることは、あくまでも神に正しくあろうとされたイエスには大きな苦痛でした。サタンはイエスに、そのようなことを通らなくてもすむから、と言うのです。

2) イエスの答え

10節にあるイエスの答えも、申命記6：13を引用されています。「**あなたの神、主を恐れなければならない。主に仕えなければならない。御名によって誓わなければならない。**」

イエスは、どのようなことが自分に待っていようと、どのような苦しみに遭うとしても、わたしは父なる神に忠実に従って行くと言われます。私たちも様々な問題、苦しみを経験します。そのことは何度も学んできたことです。「**確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。**」

(Ⅱテモテ3：12)と。しかし、私たちはできるだけそのようなことは避けたいと願い、妥協を考えてしまいます。神のみこころに従うよりも、少しだけ妥協してもう少し楽な生き方、問題の少ない生き方を選択したいという誘惑を経験します。イエスご自身の生き方はどのようなことがあっても、完全なる神のみこころに従うことが最善であると知っていたゆえに、その神のみこころに従って行かれたのです。この生き方をサタンに向かって言われたとき、サタンは11節「**すると悪魔はイエスを離れて行き、見よ、御使いたちが近づいて来て仕えた。**」と何もすることができないで去って行ったのです。悪魔は究極の誘惑をイエスに対して試みましたが、イエスは完全にそれに勝利されたのです。

そして、この勝利を通してイエス・キリストがだれであるかが明らかになりました。イエスが唯一まことの救い主であることが明らかになったのです。サタンが望んだことは、イエス・キリストに罪を犯させることによって救い主としての働きができないようにすることでした。これからイエスが為そうとしている人類の罪のための贖いをできなくしようと必死に誘惑したのです。しかし、イエスはこの誘惑に完全に打ち勝ち、ご自身がまことに神が送ってくださった唯一の救い主であることを明らかにしたのです。

Iコリント15でパウロは「最初のアダム、最後のアダム」と記しています。15：45「**聖書に「最初の人アダムは生きた者となった。」と書いてありますが、最後のアダムは、生かす御霊となりました。**」。最初のアダムは神によって造られいのちを得、そこからすべての人が生まれ出てきたのです。ところが、最後のアダムは肉体のいのちではなくて「生かす御霊」、つまり、私たちに霊的ないのち、永遠に天で過ごすことのできるいのちを与えることができるお方だと言うのです。なぜなら、最初のアダムはサタンから誘惑を受けたときにその誘惑に敗北し罪を犯しましたが、最後のアダムであるイエスは、サタンの誘惑に完全に勝利し主に従い続けたのです。だから、この最後のアダムが私たちに肉のいのちではなく、天で神と永遠に過ごすことのできる霊のいのちを与えることのできるお方であると、パウロが教えたのです。

イエスが経験された三つの誘惑を見てきました。私たちはイエスがそれに勝利されたことを学んで、何が私たちに勝利をもたらすかということが明らかに分かります。それは、神のおことばです。この聖書のみことばです。それが私たちに勝利をもたらすのです。しっかりとみことばに立つことです。様々な誘惑の中にあって神が何といわれているのか、それをしっかりと見てそれに従って行くことです。

この三つの誘惑に関して、ヨハネは私たちにまた違ったことばで教えています。ヨハネ第一の手紙を見てください。2：16「**すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。**」

と、ここに三つの罪が記されています。肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢、実はこれはイエスが経験されたことです。

- (1) 肉の欲：自分の必要を神から離れて自分の手で満たそうとすることです。欲しい物を欲しいときに手に入れたい、そうでなければ満足できないとする、そのような生き方です。イエスの誘惑にも出てきました。空腹を覚えたときにその必要を神ではなく自分の力で得ようとさせました。
- (2) 目の欲：イエスが高い山から全世界の栄華を見せられたときに経験されたことです。つまり、神のみこころよりも良く見えるものがあるのです。神のみこころに従うよりもこの方が喜ばしいのではないかと…。妥協を誘うのです。
- (3) 暮らし向きの自慢：慢心が心を支配するとき、自分自身や自分の持ち物を誇り始めるのです。バークレーはこのように言います。「自分の欲求で物事を判断し、法外な見栄を張り、実際以上に自己を大きく仕立て上げようとするほら吹きである」と。すると、神のいわれることも試して見なければ信じないという傲慢な者になってしまうのです。

イエスが経験された大きな誘惑、ヨハネはそれはこの世にあって私たち一人一人も経験することであるから、気を付けるようにと教えるのです。サタンは私たちにもこのように働きかけてきます。神への不信感を植え付けようとし、神に頼らないようにし、神のみこころに従わないようにとします。だから、私たちは神のみことばにしっかりと立つことが必要なのです。感謝なことに、神は私たちがいかに弱い者であるかをご存じです。大きな励ましのみことばがいくつかありますが、その中の一つ、ヘブル人への手紙の中にこのように教えている箇所があります。4：15「**私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情でき**

ない方ではありません。罪は犯されませんでした、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。」、
私たちのために祈ってくださっている方、私たちのためにとりなしてくださっている方、この大祭司イエスは、私たちが日々経験する様々な試みに、もうご自分も経験されたというのです。ただ一つ違うのはイエスは罪を犯すことはなかったということです。でも、その誘惑の大変さは分かっていると、そのイエスが私たちを支え続けてくださるのです。だから私たちは、誘惑が私たちを惑わして神への信頼を失わせようとするとき、神の前に立つことです。神の助けを求めながら神のみことばに立ち、神が私に何を望んでおられるのかを知り行なうとき、イエスがそうであったように、悪魔に打ち勝つことができると教えてくれているのです。そのような歩みをもって自らをしっかり守り、神のあとについて歩んで行きましょう。